「日本は、戦後 70 年、韓国とどのような和解の道を歩んできたか」

平岩俊司（関西学院大学国際学部教授）

はじめに

・日韓関係について整理･･･国交正常化まで、国交正常化以降、そして今後
・日韓関係を規定するもの･･･韓国の対日姿勢、国際情勢、韓国政権の性格など
・日本の試みについて･･･これまでの評価、今後の課題

１．植民地統治，終戦、そして日韓国交正常化

・日韓併合･･･35 年間におよぶ日本の植民地統治（1910～45 年）
・第二次世界大戦の終焉･･･朝鮮半島の解放と分断
・朝鮮半島の政権担当者にとっての“独立”･･･日本は“克服”の対象
・冷戦と朝鮮半島･･･政権の正統性を争う南北→日本との向き合い方
・李承晩政権とサンフランシスコ平和会議･･･韓国の条約署名参加要請は拒否
・韓国の葛藤･･･日本は「克服の対象（「心情」）」であり「協力の対象（「理性」）」
・日韓国交正常化（1965.6）･･･予備会談（1951.10）～、7 次 14 年におよぶ交渉
＊韓国の対日姿勢･･･「心情」と「理性」、国際関係、政権の性格、北朝鮮要因

２．冷戦と日韓関係

・朴正熙政権→強力なリーダーシップ、安保、経済面からの「理性」的選択
・残される「心情」→歴史問題、竹島問題は「管理」の対象
・金大中事件と大統領暗殺未遂事件･･･日韓関係の動揺→冷戦を背景→「修復」
・新冷戦と全斗煥政権･･･安保経済協力と中曽根政権→全斗煥大統領の初訪日
・教科書問題（1982）･･･国民の「心情」については依然として「管理」
・ソウルオリンピック（1988）の成功･･･韓国の国際的地位の向上と冷戦の終焉
・河野談話（1993.08）･･･歴代政権が「踏襲」
・アジア女性基金（1995.07～）と村山総理談話（1995.08）
＊小渕・金大中日韓パートナーシップ宣言（1998. 10）
「過去の両国の関係を総括し、現在の友好協力関係を再確認するとともに、未来のあるべき両国関係について意見を交換した」。
「両首脳は日韓両国が、自由・民主主義、市場経済という普遍的理念に立脚し

た協力関係を、両国国民間の広範な交流と相互理解に基づいて今後更に発展させていくとの決意を表明した」。

３．韓国の民主化と冷戦の終焉

・ワールドカップ共催（2002）と韓流ブーム･･･肯定的側面と否定的側面
・相手に対する双方の“誤解”･･･“共有したはずの価値観”についてのズレ
・盧武鉉政権の発足（2003.02）小泉政権･･･「未来志向」、シャトル外交
・386 世代の台頭･･･世論の影響力→韓国社会の「心情」の表出
・日韓歴史共同研究（第 1 期：2002.05～2005.06、第 2 期：2007.06～2010.03）
・盧武鉉大統領の 3.1 記念式典演説（2005）･･･“謝罪と反省、賠償の要求”
・小泉談話（2005.08）･･･村山談話を「踏襲」
・李明博政権（2008～2013）･･･経済大統領としての「理性」的選択に期待
・日韓新時代共同研究（第 1 期：2009.02～2010.10、第 2 期 2011.12～2013.12）
・韓国憲法裁判所の判決（2011.08）･･･“具体的解決のために努力していない”
・野田・李明博京都会談（2011.12）･･･日本に対する「誠意」要求
・日韓秘密情報保護協定問題（2012.06）･･･延期→「心情」と「理性」の混乱
・李明博大統領の竹島上陸（2012.08）･･･複雑化する日韓関係
＊日韓関係の構造的変化･･･冷戦の終焉、韓国における民主化、韓国にとっての日本の役割の“変化”、双方の相手に対する“誤解”、そして日本の姿勢

４．日韓国交正常化 50 年の意味

・朴槿恵政権に対する期待･･･しかし、政権発足当初から厳しい日韓関係
・朴槿恵政権の対日姿勢･･･歴史問題、韓国挺身隊問題対策協議会
・韓国における G2 論･･･中国傾斜→経済関係と統一問題
・日本の存在･･･東アジアにおける日本との関係→“競争”関係
・日韓関係の“組み替え”･･･「65 年体制」を前提とする “対等な関係”へ
＊日韓首脳会談を目指す動き･･･外相会談、防衛相会談、日米韓、日中韓など

おわりに

・朴槿恵大統領･･･歴史・領土問題と安全保障・経済問題→「２トラック戦略」
・「理性」･･･具体的協力の促進、同時に日韓関係の重要性の再定義の必要性
・「心情」･･･個別対応への積極的姿勢、同時に日韓共同で検討する必要性